観測者と三人の王

成露　草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
観測者と三人の王

【Ｎコード】
Ｎ５８５５Ｙ

【作者名】
成露　草

【あらすじ】
主人公の籠目は、メルディスと言う種族の１７歳の女の子。勇者・魔王・チートと呼ばれる者達が住む世界で、三人の王――聖帝・竜帝・魔王――と共に観測者として君臨している。前観測者から、メルディスの特徴である不老不死と五感で察知したことは忘れないと言う能力を理由に観測者の座を譲られて１３年。漸く仕事が順調に回りだした頃、魔王が勇者として召喚されて・・・・・？

プロローグ（前書き）

思いっきり編集しましたm（__）m

プロローグ

【創造国書第一巻　第一章　著・観測者リズスガルド＝カッツェ】
抜粋
　余り知られていない事実だがどんな世界にも必ず、勇者や魔王、チートなどと呼ばれる者は存在する。
　その者達の事を『世界を超越する者』と言う意味を込めて、『メルティア』と呼ぶ事にしよう。
　メルティアの存在する理由は様々だが、どんな理由であろうとメルティアと世界の関係には一つの共通点がある。
　メルティアが世界にとって異端である、と言う事だ。
　中には英雄、勇者などと世界に必要とされる者もいる。
　しかしそれは必要な時に生まれることが出来た、ごく一部が得うる名だ。
　大概の者は危険人物として末梢される。
　だが簡単に殺されるようならばメルティアとは呼ばれない。
　メルティア達は世界を敵に回しても生き残った。いや、正確には死ねなかった。
　生き残り、生き残り、生き残り。
　いつしか精神崩壊を起こすメルティアが現れ、世界を破壊し始めた頃。
　メルティアの中でも更に異端である四人のメルティアが安寧に暮らす為の策を考えだした。
　自分達を受け入れることの出来る世界がないならば、自分達で世界を創ればいいのだと。
　その四人はメルティアの心が壊れることを防ぐ為に、新たに産まれ来るメルティアを幸せにする為に世界を創った。
　そしてその四人は、聖帝・竜帝・魔王・観測者となり、世界に君臨した。

ドラゴンと獣人を管理している竜帝。
魔族と魔獣を管理している魔王。
それ以外の生き物を管理している聖帝。
あらゆる世界の文化（生き物や成文化されていない物も含む）を記憶する観測者。
観測者は王と同じだけの地位と権力を持っていたが、管理するものがいないことから王とは成りえなかった。
しかし、私にはそのことに対する不満はなかった。

【創造国書第八巻　第四章　著・観測者リズスガルド＝カッツェ】
抜粋
『コンクエストヴェールンス』
これが向葵・第三期からのこの世界の名だ。
意味は、『制圧する世界』である。
制圧的な名前だが、事実制圧的な行いをしているこの世界には似合いの名前だろう。
だがこの世界に反抗する者は誰一人としていない。
なぜなら、この真実に気付いているのはごくわずかな者達だけだからだ。
大部分の者達はこの世界の存在さえ知らない。知っている者達も神話のように考えているだろう。
気付かれないように征服しているのではない。
その力量の差から誰も気づくことが出来ないのだ。
違和感など一切なく、それが当然のことのように思えるほど自然に。
だからこそ気付いた者達は畏怖から『コンクエストヴェールンス』と呼び、ついにはこの名が正式名称と成ったのだ。

＊＊＊

初代観測者が記した、創造国書全十二巻を読み終わった、二代目観測者は宰相に新しい本を用意させた。
赤い革の表紙には金糸で【創造国書第十三巻　著・二代目観測者ブラッド＝イブラゼル＝ファントムハイヴ】と記されている本である。
その一ページ目に二代目観測者、ブラットはゆっくりと文字を書いた。

＊＊＊

『袖を引かれる』――この世界では、異世界トリップすることをこう表現する。
異世界トリップの前兆としては、扉やトンネルなどを潜る、事故に遭う、気付いたらいた、と言うのが多い。だが、この国の住人は皆、袖を引かれた、と言う。それも強い力ではなく、幼い子供が控えめに、腕を振れば簡単に解けてしまう程に、そっと引かれるそうだ。
袖を引かれた者は皆、それが実際に引かれているのではないと分かる、と言っている。感覚的に引かれている様に思うらしい。
そして、振り返ってしまう前者と振り返らない後者に分かれる。
前者は、暇つぶしや旅行気分の者がほとんどだ。稀に、鬱陶しいと抗議をしに行く者もいる。異世界トリップは、負担はないが自身でするよりも幾分か時間が掛かるそうだ。
後者は、前者よりも多くいる。初めの頃は何も知らず、振り返ってしまう者もいたが、今となっては皆、それが何なのか知っているので、一々構ったりはしないのだ。
振り返らないと、それっきり袖を引かれない者もいれば、振り払っても振り払っても執拗に引かれ続ける者もいる。珍しい例では、逆異世界トリップされた者もあった。すぐに送り返したらしいが。

自分と何の関係もない者を守るより、自分の生活を守る方が大切なのは当然である。しかも、召喚主の多くは、召喚した自分の方が偉く、召喚された者は従って当然と言う固定観念があって実に図々しいのだ。

そして厄介なことに、そんな体験を５０人に１人が体験する世界ならば、いつ何時、順番が回ってきても可笑しくない（何度も袖を引かれる者もいるが）。

だから、彼が袖を引かれたのも決してあり得ないことではないのだ。

それが、魔王が勇者として、だとしても。

＊＊＊

ここまで書くと、ブラッドは深いため息を吐いた。

そして、本を宰相にしまわせると、静かに部屋を後にした。

第一話　人が通ったことのない道を選ぶ。その方が面白いから―？

もう少しで正午という頃、観測者の領域にある食堂は、今日も利用者で溢れかえっており、一日の内で最もと言っても過言ではない程の騒々しさに包まれていた。子供から老人まで、城勤めでない者も此処でしか食べられない他世界の料理を食べるために詰めかけている。これは、民のいない観測者の数少ない確実な財源の一つであった。

同じ頃、食堂からは遠い位置にある観測者の執務室で、部屋の主である観測者、籠目（カゴメ）はその音の余韻を感じながら、宰相のルルーシュ＝オチック＝オブライエンが用意した本をいつもと変わらず黙々と読んでいた。時折、従者のクラッド＝ルシルフルが用意してくれた紅茶とお茶受けを摘む以外、無駄な動きは一切ない。クラッドも琥珀色の目を穏やかにさせて籠目を静かに見守っていた。

籠目（カゴメ）は、メルディスと言う種族の十七歳の少女だ。本名は、ブラッド＝イブラゼル＝ファントムハイヴと言うのだが、双子の弟に付けられたこの渾名が気に入っており、親しい者にはこちらで呼ぶように頼んでいるのだった。

籠目の顔は、この世界ではかなり地味な方だ。セミロングの癖がある黒い髪と透けるほど白い肌、鮮やかな紅い目をしていたが、これらの色彩が魔族の中で最も眉目秀麗な魔王と同じこともあり、ますます地味さが目立ってしまっていた。

本人は、五感で察知したことは忘れないと言う特殊能力を除けば自身は至って平凡な存在であると思っていたし、そのことにコンプレックスを感じたこともなかった。また、観測者という地位に就けたのも、種族がメルディスである事が大きな要因であり、特殊能力は付属品にすぎないと考えていた。

籠目が観測者になる以前から仕えているクラッドは、籠目のその考えが間違っていると心底思っていたが、その考えに至る経緯を知

っていたので、時折諭すことはしても、強く否定することはしなかった。
食堂の騒々しさが聞こえなくなってきた頃、籠目は机に積まれていた本を全て読み終わることが出来た。今日しなければならない業務が終わり、昼寝でもしようと執務室に備え付けられているソファーに横になった所にその吉報はもたらされた。
「籠目様、魔王様の袖が引かれたそうですよ」
遅めの昼食から戻ってきたルルーシュは、外で見せている冷徹な仮面を外し、面白そうにそう言った。
肩辺りまである癖のない藍色の髪を揺らし、紺色の目を細めてながら、ソファーにいる籠目に近づいてくる。
「珍しいね。ダークが異世界に行くなんて」
ダークは魔王のファーストネームだ。フルネームは、ダーク＝リデル＝アルセンフォードという。
誰かか異世界に行くことは決して珍しいことではないので、籠目はソファーに横になったまま、感慨もなくそう答えた。
クラッドは籠目に毛布を掛けている最中で、話には一切興味がなさそうな風情だ。しかし、彼とダークの仲が悪い事を親しい者は知っていたので、内心喜んでいるだろうことに籠目とルルーシュ気付いていた。
ルルーシュは反応の薄い二人を見ると、馬鹿にするように鼻で笑った。
「ただ魔王様が異世界に行っただけで、私が話題に上げるわけがないでしょう」
少々鼻につく物言いだが、長い付き合いである籠目には慣れたもので、気にすることもしない。クラッドに関しては、主人第一の考え方であるので、籠目に悪影響が無ければ何も感じることはなかった。
「何、ダークが怒るような条件で召喚されたの？」
もしそうなら一大事、とまではいかないが、少しは困る。世界が

1つ無くなれば、1つ文化が消える事になる。調査済みで無いのなら急いで部下を派遣しなければならない。
「分かりません」
籠目の問いにルルーシュはそう返した。
そして、「何しろ前例がありませんからね」と、実に面白そうに言った。
「前例がない？　どういうこと」
続きを促しながら、籠目は自分がルルーシュと同じような顔をしているだろうことに気付いていた。
世界と言うものは膨大な数があり、文化も同じ数だけある。だが、ある程度の数を超えると、細部は違っても、大筋は似たものが多くなってくる。
それが異世界トリップと言う狭い門になると、更に顕著に表れる。
勇者、魔王、結婚、契約、身代り、間違ってなど、召喚理由は大抵決まっていた。
何度も何度も同じような話を読まされ飽き飽きしていた籠目にとって、「前例がない」と言う言葉はとても甘美なものに聞こえた。
籠目が期待に胸を膨らませていることに気付いたのだろう。ルルーシュは得意げに告げた。
「勇者として呼ばれたそうですよ」
「……勇者？」
「はい。勇者です」
「魔王ではなく？」
「籠目様。魔族の者が魔王として呼ばれるのはよくあることでしょう」
呆れた様なルルーシュの物言いに籠目は思考の海に沈んだ。
前例があるわけがない。無くて当然だ。魔王を勇者として呼ぶような阿呆な術者は普通いない。そう、2度目が起こる可能性は低い。それが、この世界の魔王と言うなら可能性はほぼゼロだ。何しろ、ここ数百年の記録に、魔王が振り返った記述は一つも無かった。こ

の様な気まぐれがまた起こるとは思えない。
思考から浮上すると同時に、籠目はソファーから勢いよく起き上がり、ルルーシュを見た。掛けられていた毛布が音を立てて絨毯の上に落ちたが、気にしている余裕はない。
その稀に見る貴重な事例を本などの媒介を通してではなく、直接この目で見たいと思ったのだ。興奮から部屋に魔力が満ちるのが籠目自身にも分かる。
普段なら、どんなに興奮していても頭の一部では冷静さを保つ事が出来たが、今回は初めての異世界、しかも貴重な事例付きだ。籠目の頭は期待に満ち溢れていた。
籠目は観測者に就任した４歳の頃から、この世界から殆ど出ていない。古参の部下達が前観測者と共に出て行ってしまった事が大きな要因だ。
観測者には管理している民がいない。よって、いなくなった数百人もの人材を簡単に確保することはできないのだ。しかも、この世界の住民で、富や権力に興味がある者はいない。野心のあるものは他の世界に行けば簡単に英雄になれるからだ。この世界にいる者たちは皆、平凡な暮らしを送りたい者たちなのである。優秀な人材はいくらでもいるが餌がない。確保するのは至難の業だった。
そこで籠目は、未成年に目を付けた。子供は未知のものに引かれる性質がある。籠目は、知識欲や研究心に熱い若者を集め、自身の知識を披露し、更なる知識の向上と躍進に尽力しようと勧誘した。
その結果、就任して１３年で漸く観測者の仕事が恙無く回り始めたのだった。資金確保のための食堂も成功を収めており、今の所大きな心配はない。
今らなら自分がいなくとも何とかなる、その考えが籠目の期待と興奮を何倍にもしていた。
また、万が一、ダークが暴れた場合、自身と聖帝と竜帝以外には止める事はおろか、生き残ることもできないと言う事実もあった。
だが、何よりも籠目に確信を与えているのは、このことをルルー

シュが自分に話したということだった。ルルーシュは、籠目が観測者の仕事を立て直す際に、一番最初に目を付けた人材だった。
ルルーシュは淫魔であり、また未成年だったので、当時は魔王の領域で暮らしていた。籠目は、今もそうだが、当時もダークには頻繁に会いに行っていたので、宰相見習いであった二十三歳のルルーシュにも出会う事が出来た。そこで、ルルーシュの能力に惚れ込み、時間はかかったが、何とか口説き落とすことに成功したのだった。
だから、ルルーシュが自分の性格をどれほど知っているかと言うことを籠目は正確に理解していた。
そして、籠目の予想通りの言葉をルルーシュは告げた。
「魔王様が行かれたのはK－２８９０の世界です。今の所、籠目様に記憶して頂かなければならない文化はありません。ですが、報告も兼ねて三日に一度はご連絡ください」
ルルーシュは最後に、「今日の業務はこれで終わりです」と言い、執務室を後にした。
籠目は、扉が閉まるまでルルーシュを見送った後、クラッドに向き直った。
クラッドは、ルルーシュ以上に籠目の性格を理解していたし、籠目もクラッドの性格を十分理解していた。クラッドが籠目のすることに対して、個人的な不満があったとしても籠目の望みを優先すると言うこともわかっていた。
だから、籠目は何も言うことなく、クラッドを連れてトリップをした。
そして二人は、ダークが女性に押し倒されている最中のベッドルームに落ちたのだった。

第一話　人が通ったことのない道を選ぶ。その方が面白いから―？

籠目は、そのある意味衝撃的な光景に何も言うこと無く、慣れたように気配を消した。そして足音もなく、ダークと見知らぬ女が乗っているベッドに近づく。

クラッドは、籠目と同じように気配を消したまま、部屋の外に出て行ってしまった。

ダークの顔は女で隠れてしまっていて見えないが、自分達に気付いている事を籠目もクラッドも分かっていた。

籠目がダークの顔の横あたりに来ると、ダークは押し倒されたまま、首だけをそちらに向けた。

女の方はダークを誘惑することに必死のようで、籠目には気づいていない。

女は中々に美人だった。白金の髪に藍色の瞳をしていて、はだけさせた服から豊かな胸が見え隠れしている。見るからにヤル気満々だ。

しかし、籠目にはダークにその気が無いことが良く分かっていたので、困ったように苦笑した。それを見て、ダークも同じように苦笑を浮かべる。

籠目とダークの付き合いはとても長い。籠目からすれば生まれた時からの付き合いである。

これには、籠目とダークの半身と言う繋がりが大きくかかわっていた。

半身には五つの特徴がある。

一つ目は、身体的色彩が同一であること。髪や目、肌と言った体の色が同じなのである。

二つ目は、念話が使えること。やろうと思えば、会話だけでなく五感で感じていることもそのまま伝える事ができる。

三つ目は二つ目に付随していて、感情が二分の一の濃度で反映す

ること。片方が怒っていると、もう片方も怒りを感じる。
四つ目は、名前の反転。生き物には、生まれる前から持っている名前――真名（マナ）がある。大多数の者はその存在を忘れているが、魔力の強い者になるとそれを覚えていて、神語で体に描かれていることもあった。その場合は、他の者に見られないよう、花で覆い隠されていた。
それが、半身の場合、お互いの名前が逆になって体の一部に現れるのである。
五つ目は、三大欲求の特化と欠如である。食欲・性欲・眠欲のどれかに片方が特化すると、片方はそれが欠如されてしまうのだ。より正確に言えば、特化している方に欠如している方の欲が流れ込んでいると言えた。
この事から、籠目とダークは生まれてからずっと精神は一緒にいたのである。
ダークよりずっと後に生まれた籠目は、その所為で二歳になるまで自分とダークの分かれ目を見つける事が出来ず、指一本動かせなかったが、この少々特殊な関係を面白いと思っていた。
“助けた方がいい？”
声を出せば、流石に気付かれてしまうので籠目は無音でダークに聞いた。
ダークはその問いを笑うと、女を消し、ノーモーションで起き上がった。女は別の部屋に移転されたと言うことが、魔力の残滓から分かった。
ダークはベッドから足を下ろして腰かけると、右隣を叩き、籠目に座る様に促した。
ただ座っているだけなのにとても艶めいていて、誘われているのでは無いかと勘違いしそうな色気だが、それに慣れてしまっている籠目は何とも思わず、隣に腰かけた。
籠目が隣に座ると、ダークは満足げな笑みを籠目に向けた。上機嫌な様で籠目にもその感情が伝わってくる。そして、籠目もそれに

引っ張られるように意味もなく楽しくなった。
それからしばらくの間、手を握ったり、抱きしめあったり、頬にキスをしあったりしてじゃれていると、クラッドが茶器一式を持って部屋に戻ってきた。
ベッドで、犬か猫がじゃれあう様にしている二人を見てもクラッドは何も言わず、黙々と紅茶の準備を進めた。
当初、クラッドは、二人のこの状況は少々不味いのではないかと思っていたが、ダークが悪魔と竜人の混血児だと知ってからは特に心配することは無くなった。
性質はかなり違うが、悪魔も竜人も生涯の相手はたった一人と決まっていたからだ。
時たま、籠目がダークの生涯の相手――番なのではないかといぶかしんだが、籠目が十七歳になっても何も言ってこないので恐らく違ったのだろうとクラッドは思った。
それに何より、籠目がそのじゃれ合いを「義兄弟と遊んでいるみたいだ」と言って楽しんでいたので、クラッドは止めることはしなかった。
クラッドとダークの仲は悪いが、それはお互いの性格が理由で、籠目は全く関係なかった。
「籠目様、紅茶の用意が整いました」
「今行く」
籠目はクラッドの言葉を聞くと、ダークの手を引いて寝室の一角にあったテーブルセットに向かった。
小さめの丸テーブルの上には二人分の紅茶と茶菓子が用意してある。
ふんわりとした紅茶の香りが籠目の鼻に届いた。
そこで、籠目はこの世界はまだ調べていないと確信した。紅茶の香りに覚えが無かったからだ。
テーブルの前には二人掛けのソファーが一つしか無かったので、二人は並んで座った。

紅茶を飲んでみると、やはり籠目が一度も味わったことのない味だった。
味はコーヒーに近く、不快感で籠目の眉間にしわが寄る。
クラッドが紅茶だと表現したからには発酵させたものだとは思うが、どんな茶葉を使ったらこの味になるのだろうかと籠目は心底疑問に思った。
籠目は甘い物も辛い物もすっぱい物も平気だが、苦い物だけは大嫌いだった。
そのことは、長い付き合いであるダークもクラッドもよく知っているので、籠目が一口飲んだのを確認すると、ダークは茶菓子が甘いことを確認した後、籠目の口に放り込み、クラッドは紅茶にミルクと砂糖を入れた。
籠目は茶菓子で苦みを消した後、見た目ミルクティー、味コーヒーミルクを流し込むと二人にお礼を言った。
それに対して、二人が笑顔で答えると籠目は本題に移った。
「ダーク、聞きたいことがあるんだけどいい？」
クラッドも会話を聞いているので籠目は声に出して聞いた。
ダークもそのことを分かっているので同じように声に出して答えた。
「籠目が聞きたいのは、なぜ俺が振り返ったかってことだろう？」
その確信気味の問いに籠目は頷くことで答える。
「小旅行のつもりだったんだ。最近は法整備も完了したし、子供も手のかかる歳は過ぎたから時間はあった」
“籠目や他の王の奴らは忙しいから、あまり相手にしてくれないしな”
無言で言われた言葉の続きに、籠目は笑いながらダークの足を数回叩いた。
因みに、子供とはダークの子供ではなく、城に住んでいる魔族の子供のことを指している。魔族は力加減が苦手な者が多く、殺し事は無いが怪我をさせることはよくあるので、滅多に生まれない魔族

の子供の保護をしていた。
「で、あとは籠目も知っている通りだ」
「魔王なのに勇者として召喚されたのよね」
「ああ、面白いだろう？」
「うん。すごく面白い」
二人は顔を見合わせて、内緒話でもするように笑い合った。
「だが籠目、仕事の方はいいのか？　ルルーシュがうるさいだろう」
笑いが収まるとダークは悪戯をする子供の様な顔をして籠目に聞いた。
籠目からもダークの所に遊びに行くが、その逆の方が断然多い。しかし、その半分以上は仕事中と言う理由でルルーシュに追い出されてしまうのだ。
だから、ダークは籠目が無断でここに来ているのだと思っていた。
「それがね、今回、私にこのことを教えてくれたのはルルーシュ本人なのよね」
「……なるほど。確かに魔王が勇者として召喚なんて、そうそうない事だろうからな」
ダークは、籠目の言葉に驚いて目を見開いたが、すぐにその心裏に気づいて苦笑した。
「だから心おきなくダークの小旅行に付いて行くから、そのつもりでね」
籠目がそう言うと、ダークは苦笑から満面の笑みに表情を変えた。
その後、今後について話し合いをしようかと思ったが、籠目が欠伸をしたことで明日に持ち越しとなった。
クラッドが、二人が話している間にベッドの枕からシーツまで籠目の物に入れ替えていたので直ぐに眠ることが出来た。
ベッドに横になると籠目は直ぐに眠りに落ちて行った。
籠目が寝た後、眠る必要がないダークと下準備に余念のないクラッドは、どこか不穏な空気を醸しながらも、籠目を起こさない為に静かに明日までの時間を過ごした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5855y/

観測者と三人の王

2011年12月17日10時53分発行